

STAGE 1-12

福岡工場

新設 2002 (平成14) 年閉鎖

竣工 DATA

竣工年月	1972 (昭和47) 年9月	
設計者	松本設計	
施工者	東急建設	
施設概要	敷地面積	3,311.50㎡
	延べ床面積	9,326.44㎡
	構造	RC造4階建
	プラットホーム	開放型低床式
	防熱方式	外防熱
収容能力	総トン数	10,336t
	F級	10,336 t
	C級	×
	C&F	×
	ドライ	×
	凍結	36t/日
	冷却設備	施工者 中須製作所
	冷凍機メーカー 前川製作所	
	主要冷凍機 高速多気筒冷凍機	
	冷媒 R-22	
	冷却方式 集中式・直接膨張式・ユニットクーラー	
その他設備	油圧直接式エレベーター2基、モノリフト2基	



福岡工場 (1972 (昭和47) 年)



神戸工場にもあった旧式の垂直搬送機
旧福岡、神戸の2工場の設計は同じ会社であったため、基本構造は同じだった。



1階低床式プラットホーム

全羽追い出すのに数カ月掛かったなあ。そういえば、4階の荷捌き一部を加工場にして、地元の食品メーカーに貸していたこともあるんだ。

当社はこの頃から、地元の食品関連会社に空いているスペースを貸すことで、成長の後押しを結構やっていた、その中の何社かは、日本を代表するメーカーにまで成長しているんだよ。

熱田工場と福岡工場は低床式のプラットホームですよ。新港埠頭工場以来の高床式のプラットホームが、なぜここで低床式に戻されているのですか？

「戻された」とは少し意味合いが違うかなあ。さっき話をした通り、熱田工場は市場型、旧福岡工場は産地型に港湾型をミックスしたような事業所だったので、様々な形態の貨物を受け入れる関係で、効率を考えると低床式の方が使い勝手が良かったんだと思うよ。

九州地区で漁獲された青物類 (アジ、サバなど) は、三八 (さんばち) 箱と言われる木箱に入れてセリに掛けられ、福岡工場では木箱の状態凍結していた。



当時の工務担者のつぶやき

福岡工場は、産地型、都市型両方の機能を持った冷蔵庫で、福岡漁港に水揚げされる水産物を凍結したり、箱崎のコンテナターミナルに揚荷される輸入コンテナや在来船貨物の保税品の搬入を行ったり、更に福岡近隣には明太子や練り製品などの水産加工会社がたくさんあり、その原料や製品、そして外食向けの乳製品など、多岐に渡る貨物を取り扱い、とにかく忙しい事業所でした。

当時は工務担当者といっても倉番と現場でのフォークマンを兼任するのが当たり前の時代で、どちらかといえば現場が落ち着いてから本来の工務の仕事をするような環境でした。デフロストを自動で行うためのスイッチが操作盤に設置されていたのですが、デフロスト水の温度を上げるための操作は手作業でバルブ操作をしなければならず、現場が忙しい時などは度々失念してしまい、高圧遮断器が作動して圧縮機を停止させてしまったということもありました。

現在では技術部ができて工務業務に専念することができるようになりましたが、工務が現場他を兼任していた当時は、機械類の整備も十分に行う時間が無く、結果として後日発生した冷凍機への水分混入事故と言う、大きなトラブル発生につながった可能性もあったと思われます。



工務機械室の操作盤

名古屋地区に続く全国展開！九州への初上陸！

鮮魚から輸入荷物まで何でもこいの冷蔵倉庫

熱田工場に続いて福岡にも進出しましたね。

福岡工場は那の津埠頭にあって、福岡中央卸売市場からも10分程度のところにできたんだ (中洲からも10分…)。

福岡市と言えば九州でも一番の消費地なんだけど、当時は巻網船やトロール船や、近隣の小さな魚市場で水揚げされた鮮魚が集まる産地市場でもあったんだ。だから輸入荷物や加工品だけではなく、福岡の魚市場で水揚げされていた鮮魚を凍結する設備もあったんだよ。

私たちの持つ福岡 (博多) = 都会のイメージからは想像できないですね。

福岡工場は前川製作所製の高速多気筒冷凍機を初めて採用した事業所だったね。

また、当時としては斬新な「外防熱工法」を採用していたよ。

でも、4階は簡易な二重構造となっていて、断熱が十分でないため夏場は冷えにくかったんだ。おまけに屋上に設置されていた換気塔が腐食して穴が開いていて、その穴にハトが巣を作ってしまう、

column 簡易型凍結庫

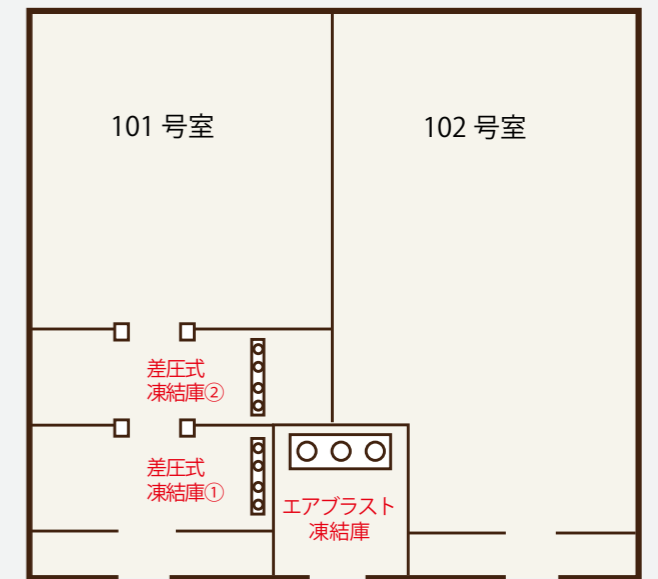
当時、西日本地区は巻網漁船による漁獲量が急増し、福岡地区だけでなく、九州全域で凍結設備が不足していた。だから1階左側にある保管庫内入口側を区切って、冷却器とファンを6基設置して、簡易型の凍結庫を増設したんだよ。

各ブロックには区隔壁があって、市場から運ばれて来た鮮魚を②→①の順に入れた後、通路側をベニア板製の扉で閉め、独立した凍結庫として利用したんだ。一カ所あたりの凍結能力は、約36パレットだったかな？

90年後半には、通路側のベニア板製の扉はフォークリフトが幾度もぶつかって閉まらなくなり、凍結庫としての機能は失われていたんだ。そのためダンフォス製の温度自動膨張弁が正常に動作せず、冷却器への霜が早く付いてデフロスト頻度が増え、凍結時間が長くなっていったんだ。

扉を取り替える以外直す方法が無く、お金が掛かることや、周年凍結をやっていて止められないなどの理由で、他の冷蔵室への配液を手動バルブで遮断し、簡易凍結室に集中投入させて、何とか温度を下げるという綱渡りに対応していたんだよ。

1階凍結庫配置図



福岡工場の凍結庫は上図の通り既設のエアブラスト凍結庫 (8トン程度) と差圧式 (Differential Pressure Freezing) 凍結庫①②があったが、入庫の優先順位は、差圧②→①→エアブラスト凍結庫の順番で利用していた。